

## 自己評価報告書

平成 23 年 5 月 20 日現在

機関番号：34533  
研究種目：基盤研究（B）  
研究期間：2008～2011  
課題番号：20390557  
研究課題名（和文） 外来化学療法を受ける肺がん患者の生活を支援する情報提供・相談システムの開発と評価  
研究課題名（英文） Evaluation of consultation and information system for lung cancer outpatients who undergoes chemotherapy  
研究代表者  
網島 ひづる (AMIJIMA HIZURU)  
兵庫医療大学・看護学部・教授  
研究者番号：90259432

研究分野：急性看護学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：外来化学療法、肺がん患者、生活支援、情報提供、相談システム

## 1. 研究計画の概要

本研究の目的は、外来で化学療法を受ける肺がん患者の QOL(Quality of Life)を高めるために、患者の療養生活を支援する情報提供・相談システムの開発と評価を行なうことである。研究期間は4年である。まず2年間で化学療法を受ける肺がん患者の療養生活を支援するために必要な情報の調査、調査結果をもとに情報の収集と作成などをすすめ、情報を検索・有効活用できるようなデータベースを構築する。その後の2年間で、外来で化学療法を受ける肺がん患者を対象に、開発したシステムを活用して治療時期に応じた情報提供および相談活動を行なう。開発した「情報のデータベース」と医療者側の「情報提供」および「相談活動」が有機的な連携がとれるシステムである。このシステムの有用性を患者満足度、がん薬物療法における QOL 調査票、肺がん患者のセルフケア尺度（網島が開発;2005年）、出現した副作用の種類・程度、治療の中断の有無などで評価する計画である。

## 2. 研究の進捗状況

(1) 平成 20 年度は、外来で化学療法を受ける肺がん患者の生活を支援するための情報内容を明らかにするために、研究参加に同意した患者 24 名とその家族を対象に、面接調査・自己報告式質問紙調査を実施した。さらに、全国がん診療連携拠点病院で化学療法に関わる医師、看護師、薬剤師、ソーシャルワーカーなどの専門家 658 名を対象に、重要と考える情報および情報提供の現状を調査した。その結果、患者が求めている情報として抽出

されたのは、副作用の対処、治療の効果や終了の時期、ストレス・落ち込みなどの気持ちへの対処であった。家族は、治療前は病気に関すること、治療中・後は異常時や症状悪化時の対応などの情報を求めている。また、家族は患者の心理的な支援に対する戸惑いや転移に対する不安を抱いていた。専門家が重要と捉えている情報は、症状に関すること、日常生活の注意点やコツ、社会保障制度などであった。このような結果を活かして開発するシステムの情報項目を構造化した。

(2) 平成 21 年度は、前年度の成果をもとに情報内容の作成・蓄積を行い、情報検索システムを組み込むと共に、画面表示・操作性の性能を高めた試験的なシステムを開発した。情報の出力画面の項目は、「病気の理解」「治療法の理解」「セカンドオピニオン」「症状・副作用の対処」「肺理学療法」「感染予防」「日常生活の管理」「心のケア」「異常時・症状悪化の対応」「セルフチェック」「社会的役割」「経済的問題（高額医療費・所得保障）」「サポート」「通院治療」などである。また、キーワード検索システムを構築し、検索部と内容表示部とは別 window とした。内容を表示する出力画面は大画面とし、画面構成の統一、文字のフォントや大きさ、図表を工夫した。

(3) 平成 22 年度は、試験的なシステムの改良と作成したビデオの組み込み、肺がん患者を対象にした（対照群）予備的調査を実施した。システム改良は「治療法の理解」「経済的問題（高額医療費・所得保障など）」などの画面である。作成したビデオ（呼吸法、リラクゼーション、呼吸にあわせた生活動作など）に字幕などを挿入しシステムに組み込んだ。

だ。来年度は開発した有効性の調査を実施するため、評価指標の検討を行った。特に、予備的調査の結果・文献検討から患者満足度を測定するための測定尺度を考案した。

### 3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

(理由)

本研究の研究期間は4年間である。最初の2年間はシステムの開発、その後の2年間はシステムを活用した情報提供・相談活動の実施と評価を行うことを計画していた。しかし、システム開発に研究3年目までの期間を要した。システムの開発に期間を要した理由は、次のことがあげられる。

(1) 情報提供・相談システムに組み込む情報内容に間違いがないかを慎重に確認しながら作成した。そのために作成にかかる期間が延長した。また、研究協力者である医師や薬剤師、メディカルソーシャルワーカーなどの専門家による内容確認のための日数が、予定していた日数よりも延長した。

(2) 患者・家族、専門家などからの内容・画面のわかりやすさ、見やすさ、操作のしやすさなどに関する意見や感想を反映したシステムとするためにシステム改良を重ねたため、予定よりも時間がかかった。

### 4. 今後の研究の推進方策

平成20～22年度の3年間で、「外来化学療法を受ける肺癌患者の生活を支援する情報提供・相談」システムを開発した。本研究の最終年度である平成23年度は、開発したシステムの実施と評価を行う予定である。

まずは、構築した情報データシステムと医療者側の情報提供・相談活動が有機的な連携が取れる介入方法を考案する。肺癌患者を対象に開発したシステムを有効活用した治療時期に応じた相談活動を行う。それらの活動を患者満足度、がん薬物療法 QOL 調査票、肺癌患者のセルフケア尺度（網島が開発：2005年）、程度、治療の中断の有無などをもとに評価する計画である。

最終年度であることを鑑み、次のことに留意して研究を推進したい。

(1) 開発したシステムを活用した情報提供・相談活動を実施するフィールドは決定している。施設側の受け入れはよいので、早期に介入できるよう研究協力者と協力して準備する。

(2) 本研究の当初の予定では、化学療法を受ける患者・家族への介入のみの計画であったが、介入期間が短くなったことから、対象

数が減少することが予測される。そこで、模擬患者を対象に看護師による本システムを活用した情報提供・相談活動のシミュレーションを実施して評価を得る対応策を、臨床での情報提供・相談活動を行う前に実施する予定である。

(3) (2)の対応策を実施後、対象人数（肺癌患者・家族）を20名から10名程度に減らして、開発した「外来化学療法を受ける肺癌患者の生活を支援する情報提供・相談」システムを用いた情報提供・相談活動を実施し、評価したい。